

# 特別支援教育研究委員会

授業校：栗ガ丘小学校（4年3組）  
 マット運動「ミスターXからの挑戦状」

本年度栗ガ丘小学校では、研究委員会の研究推進の方向や下記構想図、及び昨年度の実践を受け、

- 「5、めあて・見通しを持って、主体的に活動に関わる力」は、通常の学級での授業（交流学习を含む）の場において、より効果的にその力を伸ばすという考えに立ち、個の実態に合わせた「D、できる状況作り」や「E、自尊感情を高める指導の工夫」の支援方法を探る。
- ・通常の学級での授業分析に基づいた、評価（＝児童理解）と「支援のあり方」の考察。
  - ・「教材、教具の工夫やできる状況作り」に焦点をあてる。
  - ・児童の特性を理解した教材化の工夫や、学習の場の工夫を行う。
  - ・通常の学級の児童の関わり(関わせ方)や教師の支援を、状況作りの方法・手立てとしてとらえ直す。
  - ・「個別の指導計画(A表)」作成において、日常生活の姿をとらえるために、「今の生活を豊かで自立的なものにするために焦点化した6つの力」を児童理解の窓口として位置づける。
- 単元の目標に準拠した評価（評価基準による評価）とその時々の評価を明確にしていく。
- ・課題を持って主体的に他や活動に関わっていく姿を分析していく。
  - ・支援のあり方へのフィードバック、教育課題の見直しに役立てる。

などを柱として、特別な教育的ニーズを持つ児童への支援のあり方について研究を深めていただいた



【対象児 A 子の様子・・・】

導入場面では、まず全体の前で自ら拳手し、その日のめあてを発表していた。この時点で、めあてや見通しを持って、主体的に活動に関わろうとしていたことが見とれた。この様に自信を持って発表できたことは、それまでの自律学級での練習の積み重ねや、自律学級担任の支援、また、通常学級の担任や子どもたちのあたたかい支えがあったと容易に想像がついた。

技の習得場面では、自律学級での練習が十分に生かせなかったところがあったようで、若干不満足そうな表情も見せたが、周囲のこの声かけやアドバイスを受け、徐々に開脚前転がうまくなっているようになっていった。

最後の振り返りの場面では、やはり拳手し、「(うまくできなくて)残念だった」と言う自己評価をしていた。しかしそれに対し同班の子が、「よくなった」と評価したことで、A子はニコッとほほえみ、「うん」とうなずいた。その表情と1時間の熱心な取り組み、周囲の子のかかわりが印象的だった。

(S)

【図1 自立的な生活を育むための構想図】

